ナースキャップ着用の有無に関する調査

—教育課程別の観点から—

片桐智子・片岡美枝子・沼澤さとみ
井上京子・佐藤幸子・遠藤芳子
松永保子・高橋清子・平塚朝子
伊藤尚子

A Research on the Treatments of Nurse Cap

− From the Viewpoint of the Different Educational Curriculums −

Tomoko KATAGIRI, Mieko KATAOKA,
Satomi NUMAZAWA, Kyoko INOUE,
Yukiko SATO, Yoshiko ENDO,
Yasuko MATSUNAGA, Kiyoko TAKAHASHI,
Asako HIRATSUKA, Hisako ITO

Abstract： This study is intended to clarify the treatments of nurse cap and the future plans of nursing schools in the different educational curriculums. We conducted a questionnaire survey of 598 nursing schools all over Japan by mail. The result of this survey is as follows:

1) 92.5% of schools adopt nurse cap, while 5.2% do not. There are evident difference by the educational curriculums ($p < 0.001$).

2) All the schools which now do not adopt nurse cap "will not change their treatments" in the future. Of the schools now adopting nurse cap, 90.4% "will not change their treatments," while 9.6% "now consider or will change their treatments." Among the schools which "now consider or will change their treatments, "there are clear difference between colleges and schools ($p < 0.001$).

key words： nurse cap, educational curriculum, future plans

はじめに

近年の高齢化の進展，医療の高度化等，看護を取り巻く社会情勢の著しい変化に伴い，看護職者としての質の向上をめざし社会の要請に応えるべく，看護基礎教育においては教育課程の改正がたびたび行われてきた。現在，看護教育機関（以下教育機関とする）には，大学をはじめ，短期大学，専修学校，各種学校など，さまざまな教育課程がある。

看護教育のなかで重要な教科目として位置づけられている臨地実習では，従来多くの教育機関が病院実習時にナースキャップ（以下キャップとする）を着用してきた実態がある。キャップとは，「縁なし，または前部につばのついた帽子の総称」[1]のことである。看護で用いられているキャップの由来は看護が宗教の影響を受けていた時代に溯り，修道女が着用していたヴェールやDeaconessが着用していた縁飾りがついた白モスリンの帽子からきたとされ，どちらも看護による社会への奉

山形県立保健医療短期大学
山形市上柳 260 番地
Yamagata School of Health Science
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, 990-2212 Japan

仕を通して神に奉仕するという宗教的意味で着用されていた。キャップも，このヴェールに由来する精神的な意味合いで着用されるようになり，広まったとみられている。わが国では，明治以後看護が職業として定着し普及する過程で，キャップと白衣の着用は一般的な傾向として現在に至っている。しかし，近年わが国では，キャップの安全性や感染源となる可能性など，看護実践上問題があるとして，キャップを廃止した病院の例が報告されている。また，国内の教育機関におけるキャップの着用状況を調査した報告例はない。キャップについては，これまでにさまざまな研究がなされており，キャップの歴史的変遷や，戴帽式に関する研究が多い。教育機関を主な教育課程別にみたキャップについての研究では，専修学校・各種学校の単位制への移行に伴い戴帽式を意義づけてきた予科期は不要となり，看護理念の修得は学生個人が自覚すべきものであって，儀式によって培われるべきものではないとの考え[2]が明らかにされている。近代におけるキャップの変遷についての研究では，形態に関することは述べられているが，学校としてのキャップに対する考え方までは言及していない。また，全国203校を対象にした戴帽式のアンケート調査結果についての研究では，戴帽式を看護職の適性判断に意味づけることの無理など，戴帽式に対する疑問点が明らかにされている。キャップと戴帽式の意義に関する研究では，キャップと戴帽式が看護の概念とどのように結びつくのか再考する必要性のあることを示唆しているが，キャップ着用の実態については明らかにしていない。３年過程の看護専門学校生を対象に戴帽式に関するアンケート調査を実施した研究では，学生が戴帽式を肯定的に受け止めていることや戴帽式が学生の自覚の高揚に役立つことを示しているが，他の教育課程については調査してはいない。そこで，私たちはキャップの着用状況を調査し，各教育機関におけるキャップに対する考え方を知ることが教育上の示唆を得る手がかりになると考えた。

本研究では，全国の看護系の大学，３年課程短期大学，３年課程専修学校，３年課程各種学校におけるキャップの着用の有無と今後の各校の方針についての現状を明らかにすることを目的とした。

方　法

1. 対　　象

対象は全国の看護系の大学51校，３年課程短期大学(以下短大）67校，３年課程専修・各種学校（以下専修学校）480校，計598校である。

2. 調査期間

平成９年５月～平成９年６月

3. 調査方法

対象とした全国の看護系の大学51校，短大67校，専修学校480校，計598校の実習調整者に郵送法によるアンケート調査を実施した。

アンケートの調査項目は，1）教育課程，2）学生のキャップ着用について，(1）実習時のキャップ着用の有無（2）着用している（していない）理由，3）実習病院における看護婦のキャップの着用について，(1）実習病院の数，(2）実習病院における看護婦のキャップ着用の有無，4）今後のキャップ着用の方針について○印で回答を求めた。

回答は，大学35校，短大50校，専修学校354校，計439校（Fig.1）であり，回収率は73.4%であった。統計処理にはSPSSを使用した。

結　果

1.　対象全体のキャップ着用の有無をFig. 2に示した。キャップを着用している（以下キャップあり）大学，短大，専修学校は439校中406校（92.5%）であり，着用していない（以下キャップなし）大学，短大，専修学校は，23校（5.2%）

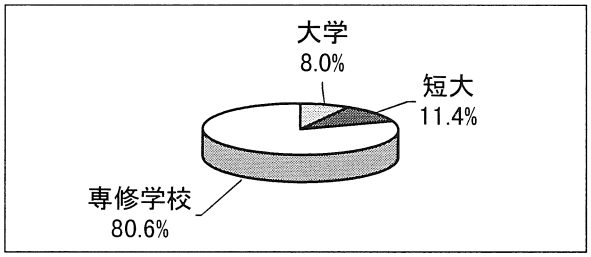

Fig. 1　教育課程

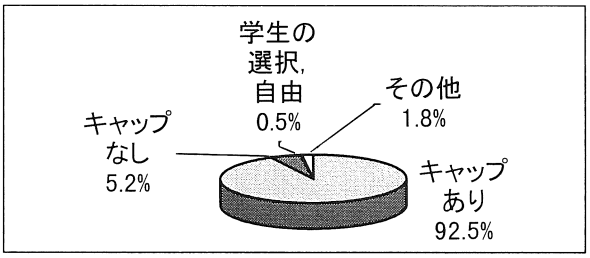

Fig. 2　対象全体のキャップ着用の有無

Table 1　教育課程別のキャップ着用状況（439 校）　（n = 439）

		キャップ着用状況				
		キャップあり	キャップなし	学生の選択、自由	その他	合計
教育課程	大学	14 (40.0)	16 (45.7)	1 (2.9)	4 (11.4)	35 (100.0)
	短大	44 (88.0)	4 (8.0)	1 (2.0)	1 (2.0)	50 (100.0)
	専修学校	348 (98.3)	3 (0.8)	0	3 (0.8)	354 (100.0)
	合計	406 (92.5)	23 (5.2)	2 (0.5)	8 (1.8)	439 (100.0)

* $P < 0.001$　　校：（　）内は%

Table 2　キャップありの理由
：学校全体（394 校，複数回答）

理由	回答数
ユニホームの一部である	331
学校の方針である	245
看護婦のシンボル（象徴）	171
髪がまとめやすい	84
伝統である	65
他職種との区別	60
清潔感がある	52
実習施設からの要望	44
学生からの要望	39
国の貸与、厚生省の指示	6
病院の方針や服装規定	5
学生の自覚を促す、意識づけ	4
髪をまとめる指導の機会	3
その他	2

であった。学生の選択，自由にしている（以下学生の選択，自由）大学，短大，専修学校は2校（0.5%）であり，その他は8校（1.8%）であった。

教育課程別にみると，Table 1 に示したように，大学では 35 校中キャップありが 14 校（40.0%），キャップなしは 16 校（45.7%），学生の選択，自由が1校（2.9%），その他は4校（11.4%）であった。短大では 50 校中キャップありが 44 校（88.0%），キャップなしは4校（8.0%），学生の選択，自由が1校（2.0%），その他は1校（2.0%）であった。専修学校では 354 校中キャップありが 348 校（98.3%），キャップなしは3校（0.8%），学生の選択，自由はなく，その他は3校（0.8%）であった。また，大学と短大，大学と専修学校，短大と専修学校間に，キャップありの割合とキャップなしの割合で有意な差（$p<0.001$）が認められた。

2. キャップありの理由として学校全体において多くあげられたのは，「ユニフォームの一部である」，「学校の方針」の2つであった（Table 2）。教育課程別にみると，大学では「学生からの要望」，短大と専修学校では「キャップはシンボル」が多かった。大学では，「キャップはシンボル」という回答はなかった。（Table 3）

3. 学校全体のキャップなしの理由としては，「看護本来の機能からみて不必要」，「学校の方針」，

Table 3　キャップありの理由：教育課程別（複数回答）

大学（14 校）		短大（44 校）		専修学校（348 校）	
理由	回答数	理由	回答数	理由	回答数
学校の方針である	6	ユニフォームの一部である	31	ユニフォームの一部である	289
ユニフォームの一部である	5	学校の方針である	29	学校の方針である	206
学生からの要望	4	看護婦のシンボル（象徴）	11	看護婦のシンボル（象徴）	156
実習施設からの要望	3	学生からの要望	8	髪がまとめやすい	77
その他	2	髪がまとめやすい	7	伝統である	59
他職種との区別	1	実習施設からの要望	6	他職種との区別	51
伝統である	1	他職種との区別	5	清潔感がある	47
		清潔感がある	5	実習施設からの要望	34
		伝統である	4	学生からの要望	26
		その他	2	その他	16

Table 4　キャップなしの理由
：学校全体（23校，複数回答）

理　由	回答数
本来の機能からみて不必要	13
学校の方針である	11
引っかかりやすい、邪魔	8
学生からの要望	6
不潔である	5
角が危険	4
実習施設からの要望	2
清潔感がある	1
伝統である	1
主な実習病院が着用しない	1
看護婦との区別になる	1

「引っかかりやすい」が多かった（Table 4）。教育課程別のキャップなしの理由では，「看護本来の機能からみて不必要」，「学校の方針」，「引っかかりやすい」が主なものとしてあげられていた。その次に，大学では「学生からの要望」，短大と専修学校では「不潔である」が続いていた。少数ではあるが，「角が危険」という理由もあった（Table 5）。

4.　今後の方針として，キャップなしの学校では，すべて「変える予定はない」という回答であった。キャップありの学校では「変える予定はない」が394校中356校（90.4%），「変える予定，検討中（今後検討予定を含む）」が38校（9.6%）であった（Table 6）。教育課程別キャップ着用の今後の方針をTable 7に示した。「変える予定はない」と「変える予定，検討中」の割合をみると，大学と専修学校との間に有意差（$p < 0.001$）が認められた。

考　察

大学，短大，専修学校におけるキャップありの割合は，92.5%を占めた。その主な理由は，「ユニフォームの一部である」，「学校の方針」，「キャップはシンボル」であった。これらの回答の背景としては，わが国に「英国の看護婦の姿がそのまま取り入れ」られ，「看護婦養成の初期より」，「看護帽の重要さが」，「養成所において，教え伝えられ

Table 5　キャップなしの理由：教育課程別（複数回答）

大　学（16校）		短　大（4校）		専修学校（3校）	
理　由	回答数	理　由	回答数	理　由	回答数
本来の機能からみて不必要	8	引っかかりやすい、邪魔	2	学校の方針である	3
学校の方針である	6	学校の方針である	2	本来の機能からみて不必要	3
引っかかりやすい、邪魔	4	本来の機能からみて不必要	2	引っかかりやすい、邪魔	2
学生からの要望	4	不潔である	2	不潔である	2
角が危険	2	角が危険	1	角が危険	1
実習施設からの要望	1	学生からの要望	1	学生からの要望	1
不潔である	1	実習施設からの要望	1		
その他	1	伝統である	1		
		清潔感がある	1		
		その他	1		

Table 6　今後のキャップ着用の方針

		今後の方針				
		変える予定なし	変える予定	現在検討中	今後検討予定	合計
着用の有無	キャップあり	356 (90.4)	1 (0.2)	32 (8.1)	5 (1.3)	394 (100.0)
	キャップなし	23 (100.0)	0	0	0	23 (100.0)
	その他	6 (66.7)	0	2 (22.2)	1 (11.1)	9 (100.0)
	合　計	385 (90.4)	1 (0.2)	34 (8.0)	6 (1.4)	426 (100.0)

校：（　）内は%

Table 7　キャップありの学校における教育課程別今後の方針（394 校）　（n = 394）

教育課程	今後の方針：変える予定なし		変える予定 現在検討中 今後検討予定		合計
大学	9 (64.3)	*	5 (35.7)	*	14 (100.0)
短大	33 (82.5)		7 (17.5)		40 (100.0)
専修学校	314 (92.4)		26 (7.6)		340 (100.0)
合計	356 (90.4)		38 (9.6)		394 (100.0)

* $p < 0.001$　　校：（　）内は％

て」[3] きたこと，キャップを「看護婦を象徴するもの」[4] としているように，19 世紀前半にわが国が英国での看護婦の洋服と帽子をそのまま取り入れて今日に至っていることや，学校設立当初からキャップを着用する方針が変わらないこと，また，キャップが看護の精神を表す象徴として捉えられてきたことなどの歴史的経緯が影響していると考えられる。

キャップなしの理由のなかで「学校の方針」以外に全教育課程に共通している項目は，1992 年頃から徐々に増えつつある病院でのキャップの自由化や廃止の理由としてあげられている「看護本来の機能からみて不必要」,「引っかかりやすい」,「角が危険」などである。このことやキャップ着用の今後の方針としてキャップなしの学校が全て「変える予定はない」という回答だったことから，キャップなしの学校では，キャップがなくても問題はないと考えていることが推察される。

着用の有無，着用の理由および今後の方針に教育課程別の違いがあるのは大学，短大，専修学校の設立年代の影響など歴史的な背景の違いが要因になっていることも考えられる。

大学は，キャップありの割合が 40.0％であり，「キャップはシンボル」という回答がなかったこと，キャップ着用の有無にかかわらず，その理由に「学生からの要望である」があげられていることから，キャップを看護の象徴として捉えておらず，キャップの着用に関し学生の意見を反映させていることがうかがえる。

近年，病院におけるキャップの自由化や廃止の動きとあいまって，大学でのキャップなしの割合が高いことが他の学校にも影響を及ぼしていると推測される。また，全教育課程において，今後の方針に「変える予定，検討中」の学校があることから，キャップの着用について検討する教育機関が今後増加するのではないかと予想される。

めまぐるしく変わる社会情勢や価値観の多様化，看護概念の変化に伴い，看護教育においても，教育内容を充実させ新しい時代に適応できる質の高い教育が求められつつある。そのためにも，看護の原点から現在の看護基礎教育の内容を十分検討することが重要な課題となるであろう。また，さらに，氏家が「それをなぜするのか？それが現在の看護の概念とどう結びつくのか？ということを問いかけながら行動しなければならない」[5] と述べているように，キャップとは何か，何のために着用するのかということを，それぞれの看護教育の場において看護者である私たちひとりひとりが再考し，看護者としての役割を果たしていくことが重要と考える。

結　論

1. 全国の看護系の大学，3 年課程短期大学，3 年課程専修学校，3 年課程各種学校におけるキャップの着用の割合はキャップあり 92.5％，キャップなし 5.2％であり，大学と短大，短大と専修学校，大学と専修学校に有意差（$p<0.001$）があった。
2. 今後の方針は，キャップなしの全ての学校が「変える予定はない」であった。キャップありの学校は「変える予定はない」90.4％，「変える予定，検討中」9.6％であり，教育課程別での割

合において大学と専修学校との間に有意差（$p<0.001$）があった。

謝　辞

アンケート調査にご協力いただきました全国の看護系大学，短大，専修学校の実習調整者の皆様に深く感謝いたします。

文　献

1) 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明：日本語大辞典 第二版，529，1997.
2) 仙田洋子：看護における戴帽の変遷とその背景，看護教育，75，1967.
3) 前掲書 2)，74.
4) 長門谷洋治：戴帽式―その意義と歴史―，看護技術，96-105，1971.
5) 氏家幸子：キャッピングの意義と虚構性，看護技術，111，1971.
6) 雨宮 忠，草原克豪，辻村哲夫，谷 修一：保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の一部を改正する省令の公布について，看護教育新カリキュラム展開ガイドブック No.13 保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則等の改正，10-12，1996.
7) 前掲書 6)，32.
8) 前掲書 6)，102-103.
9) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生の指標 臨時増刊，191，1998.
10) Josephine A. Dolan（小野泰博，内尾貞子訳）：看護・医療の歴史，誠信書房，139-140, 210-214, 1995.
11) 山本博子：キャップを廃止した病院の考え，クリニカルスタディ，64-65，1998.
12) 柏倉淑子，横田三枝，伊藤道子，沼田彩子，鈴木妙子：患者とナースキャップをはずした看護婦，看護学雑誌，290-291，1997.
13) 村尾都子：キャップのないユニフォーム，看護，22，1986.
14) 平尾真智子：ナースキャップの歴史，クリニカルスタディ，66-67，71-72，1998.
15) 亀山美知子：日本の看護婦の制服の歴史―近代を中心に―，看護，58-63，65-68，1986.
16) 仙田洋子：戴帽式の現状と将来への展望，看護教育，43-50．1970.
17) 前掲書 5)，106-112.
18) 山地教代，古長益子，山田一朗：今，改めて問う戴帽式の意義 第1報 戴帽式に対する看護学生の思い，日本看護研究学会雑誌，142，1998.
19) 古長益子，山地教代，山田一朗：今，改めて問う戴帽式の意義 第2報 学生の意欲と戴帽式に対する思いの関連，日本看護研究学会雑誌，143，1998.

― 1998. 11. 9. 受稿，1999. 1. 8. 受理 ―

要　約

この研究の目的は，全国の看護系の大学51校，短大67校，専修学校480校，計598校におけるキャップの着用の有無と今後の方針の現状を教育課程別に明らかにすることである。全国の看護系の大学，短大，専修学校，598校を対象に，郵送法でアンケート調査を行った。その結果，以下の知見が得られた。

1) キャップを着用している割合は，キャップあり92.5%，キャップなし5.2%であり，大学と短大，短大と専修学校，大学と専修学校間それぞれに有意差（$p<0.001$）があった。
2) 今後の方針は，キャップなしの大学，短大，専修学校が，「変える予定はない」であった。キャップありの大学，短大，専修学校は，「変える予定はない」が90.4%，「変える予定，検討中」は9.6%であった。キャップありの学校における「変える予定，検討中」の教育課程別の割合では，大学と専修学校との間に有意差（$p<0.001$）があった。

キーワード：ナースキャップ，教育課程，今後の方針